

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	3 年
講義日	令和 8 年 12 月 2 日（水） / 令和 9 年 1 月 22 日(金)		
テーマ	英国事情 （1）イギリスの奴隷貿易 （2）イギリスの移民政策		
講 師	岡田 章宏（神戸大学名誉教授）		
講義内容			
本講義の対象であるイギリスというと、すぐさま白人社会を思い浮かべる人も多いと思います。しかし実際には、白人系イギリス人は約 8 割で、あとの 2 割は、アフリカ系、アジア系など移民の背景を持つイギリス人と言われています。特にロンドンでは、白人は 6 割程度しかおらず、あとは有色人種であり、この国がしばしば多民族国家とされるゆえんも理解できます。 では、どうして民族・人種を異にする人びとがかくも多くこの国に住むようになったのでしょうか。 端的に言えば、そこには、世界の陸地の 4 分の 1 を支配下におき「太陽の沈まない国」とまで言われた「大英帝国」の歴史があり、それを作り上げた「奴隷貿易」の歴史があります。イギリスは、16 世紀から 19 世紀にかけて、ポルトガル、スペイン、フランスとともに、国家事業として、アフリカ大陸各地から多くの黒人を南北アメリカ大陸、西インド諸島へ送り込み（強制移民）、砂糖やたばこなどを生産し、その結果、巨額の富を獲得し、産業革命の基礎を作ったとも言われます。 そして、第二次大戦後になると、その西インド諸島の国々から大量の黒人がイギリス国内に流入し、非熟練労働者として経済成長の土台を作ったのです。その過程では、彼・彼女らを排斥しようとする機運が高まり、様々な軋轢を生んだこともありますが、逆に、彼・彼女らをむしろ社会に包摂し、共生の社会を作ろうとする動きもあり、今日まで移民をめぐる双方の考え方が併存してきました。 わが国では、多民族という観点からイギリス社会を理解する議論は必ずしも多くはありませんが、今や世界的に注目度を増しつつある移民問題を念頭におけば、こうした視点からこの国を捉え、そこに含まれた問題を整理することも無意味ではないと思います。今回の講義では、「英国事情」をより立体的に認識するために、イギリス社会と移民（黒人）という関係を取りあげ、それを少しスパンの長い歴史の中で眺めていくことにします。（1）では「奴隷貿易」を、（2）では「戦後の移民政策」を中心に見ていくことにします。			
講師からのメッセージ			
現代の日本社会で生じつつある移民問題に関心を持ち、そこでの論点を整理してみましょう。それを踏まえて、講義で対象にするイギリスと比較すると、日本の特徴も見えてくると思います。			